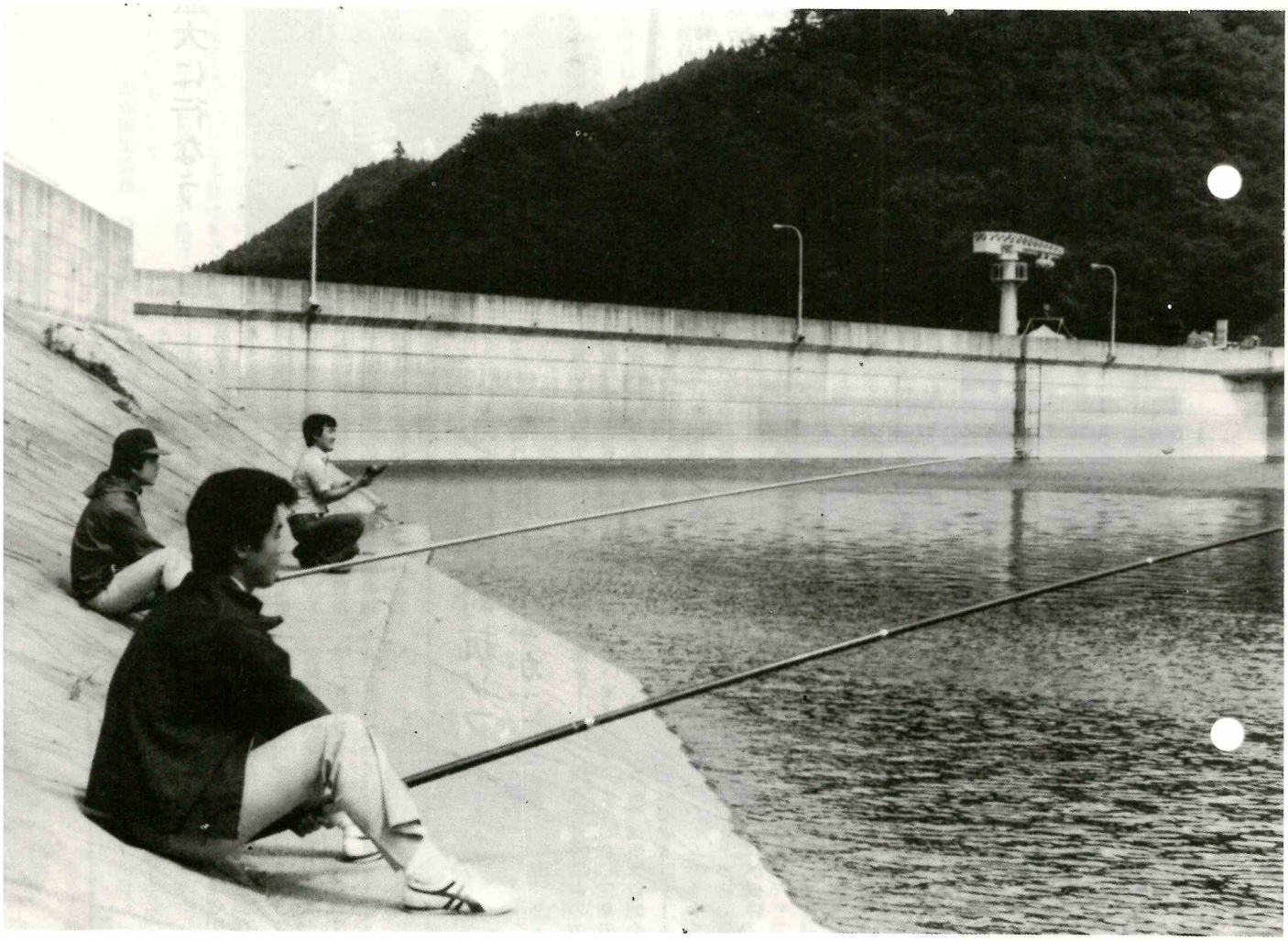
館報 おおくま

おもな内容

2面…各学級合同開講式
3面…清流、夏休みを迎えて
4面…詩吟講座に想う
5面…和牛を増やそう
6面…文　芸
7面・8面…みんなの広場

発行編集　大熊町公民館
印刷所　新栄社写真美術印刷㈱



釣り

桜の花が散り初めた頃に
花見の客と入れ変り
太公望がやって来て
思い思いの釣り場を探し
釣り糸を垂れジーッと
竿先を見つめてる。
静かだ。
遠く耳鳴りのように鉄橋を渡る
電車の響きが聞こえてくる。
そっと近寄り聞いてみた、
鮒、鯉、冬はワカサギ等
が釣れ、真夏になると
夜明けと共にやってきて
炎天下色とりどりの
ビーチパラソルの花が咲く
その風景を一度は見ても
いいものだよ、と
小さな声で教えてくれた。
この人、相当の釣り吉か、

（写真は坂下ダムでの釣り風景）

高令者大学 婦人学級 家庭教育学級 合同開講式・盛大に行なう

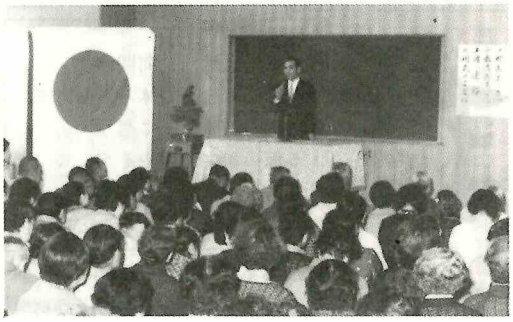
昭和五十六年度各学級の合同開講式を去る五月二十七日、町公民館に於て実施されました。開講式には太田教育長ほか関係者、各学級生二百三十名が出席し、町民憲章を唱和、国歌「君が代」を斉唱太田教育長の挨拶　松本六郎議会議長の祝辞　坂本栄盆栽水石愛好会副会長より丹精して育てたサツキの苗木（一七〇本）「長寿宝」を橋本鉄治郎委員長に贈呈、高令者に一本ずつ配られました。

○　高令者大学は「太陽の国」の施設長羽柴　達先生より「仲間づくりと生きがいをもとめて」

○　婦人学級は県婦人教育指導員木幡キサ先生より「婦人の学習とボランティア活動について」

○　家庭教育学級は元小高小学校長吉津守雄先生より「家庭環境と子どもの成長について」お話をききました。合同の開講式は始めてでありましたが、盛会に終ることができました。

学級生の皆さん、出席できなかった隣近所のお友達に、折りに振れてお話していただけば幸甚と思います。



ママさんテニス教室で楽しい仲間づくり

去る五月二十四日より毎週土曜日、五回にわたり大熊町営テニスコートにおいて、参加者三十七名をむかえて盛大に開催された。

講師には体育指導委員の小野田正一先生と小高工業高校教諭の相良雄史先生を招き、テニスの基本と実技を通して楽しい仲間づくりまで指導された。最終日（六月二十日）にはママさんテニスクラブが結成され毎週水・土曜日午後一時より町営テニスコートで活動することになっている。

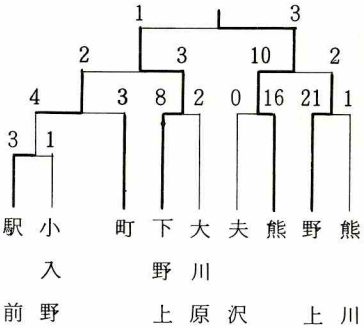
少年部落対抗ソフト大会 熊チームが二連勝

去る五月三十一日体育協会、公民館共催による第六回少年ソフト大会が、熊町小校庭で午前八時三十分試合開始で行なわれた。

開会式は体協副会長、町議会議長あいさつ、球技上の注意のあと、熊チーム小学校六年仲野剛君の力強い選手宣誓が行なわれ、定刻の午前八時三十分に渡部悟体協副会長の始球式で駅前対小入野チームで試合が開始、各チームの選手たちの元気あふれるプレーで終始熱戦が展開され、熊チームが優勝。町長杯を授与されました。

なお成績は次の通りです。

優勝　熊、準優勝　下野上、三位　駅前、三位　野上



―成人式は八月十五日です―

八月十五日(土)は、大熊町の成人式です。各部落の区長さんを通し、成人式への参加者を調査しましたが、報告もれの方は当日ご出席下さい。昭和三十六年四月二日から昭和三十七年四月一日までに生まれた方。

〈成人式開始時刻〉

午前八時五十分より大熊町公民館講堂において行ないます。早めに受付をすませて下さい。

夏休みを迎えて

町内の幼小中学校児童生徒は、七月二十一日から八月二十日まで三十五日間という長い夏休みに入りますが、この期間無事故で明るく楽しく有意義に過ごすようにしましょう。

夏休みは、子どもを「夏の猛暑から守る」といわれておりますが、①海や山の自然に触れることを通して心身を鍛え見聞を広める絶好の機会であります。②家庭生活を通して家族の一員として結びを深めましょう。

各家庭でそれぞれ特色ある生活をさせながら、子どもの能力に応じた家事を分担させ、家族の一員としての役割と責任と誇りをもたせると共に、家庭のルールを通して社会のルールを学ばせることも大切だと思います。③ムリ　ムラ　ムダのない計画をたて自主的、自律的な生活態度を育てましょう。勿論勉強も忘れずに「夏休みの友」と仲良く学習すると共に、一学期によく理解されなかったことを復習することも必要です。

また子ども会、スポーツ少年団盆踊り　清掃作業にも積極的に参加させ、社会参加の意識、連帯感を深めることが大切です。

休みになると学校から解放され心のゆるみから、交通・水難・花火遊び・建築材料置場・路上遊び等による事故をおこさないようにすると共に夜間外出の機会が多くなり、「でき心からつい手を」だし問題を起しやすい、年々非行も低年令化し、シンナー遊び・不純異性交友等遊び型非行になっているようです。

家庭は子どもの心身発達を支える土壌であり、水であり、太陽です。豊かな精神的大地に親の愛を受けて育つ若木は多少の嵐に負けない根を張るだろう。常に笑い声のある明るい家庭からは「カビの生えた湿った非行は」決して生えてこないでしょう。母親は家庭の中で、みんなの太陽であります。

母の日差しこそ……「愛の一声」で「明るく楽しい夏休みだった」としたいものです。

清流

三拍子のリズム

館報編集委員　志賀栄子

私たちの年代になると、孫の成長が楽しみである。

孫の一人は、男の子で一才五ケ月になるが、まだよくしゃべれない。でもこちらの言うことはなんでもわかる。「おじいちゃんのお肩トントンして。」というと眼を輝やかし、わかったというようにおじいちゃんの背にまわって肩をトントン叩く、もう一人の孫は女の子で十ケ月になるが、電話をかける度に、受話器のそばで元気のよい声を出す。名前を呼ぶと、どこから声が聞こえてくるのかと、けげんそうな顔をするという。この頃では一人遊びに飽きると母親のところに来る。そんな時、いろいろと声をかけてやると心が安まるのかまた一人遊びをするという。幼児教育は〇才からといわれているが周囲でも幼児の心身の発達には上手に手を貸してやりたいものである。

そんな矢先、回覧板をもって隣組の志賀文子さんのお宅にお邪魔していろいろと孫の話にはずんでいた時、とても参考になるお話をお聞きした。お孫さんは美香ちゃんといい、東京に住み、もう五ケ月という。とても愛らしく写真をみせていただいた。美香ちゃんのお母さんは先生で幼児教育の研究をなさっていることもあり、お子さんの育児についてもさすがだなあと感服した。それは、美香ちゃんがまだ五ケ月だというのに三拍子のリズムをうつという。

トントントンと三つ叩くと、今度は、左手で三つトントントンと叩く。次は右手で、その次は左手で交互に叩く。お母さんが作ったキャラメルの空き箱（中にお米を入れて作った）を持たせても、器用に持ち換えて三拍子をうつという。このリズム感覚をこんな小さいうちから体得した不思議さにおどろいた。これもお母さんが教えなくては養なわれないリズム感である。手足の運動とリズム感は脳細胞の発達に非常に関係があると聞いたことがあるが、まさにこれだなあとすばらしい育児教育に感心した。

また寝返り一つにしても幼な子なりに努力し工夫してうまく腹ばいが出来るようになる、その成長の課程が考える力を伸ばすことになるのである。まだ小さいから、まだ何もわからないからとおろそかにしないで、お母さんが子どもに充分な話しかけを進めていくべきだと思う。

行事案内

◇熊町部落婦人学級
七月二十三日(木)午後七時

◇婦人学級　七月十七日(金)

◇高令者大学　七月下旬

◇親子読書会
七月三十日(木)

◇青年学級
七月二十六日(日)

◇郡野球大会（大熊町球場）
八月八日(土)午前八時半

◇県民スポーツ大会（浪江町）
八月二十三日(日)午前八時

◇町民体育祭
九月六日(日)　大熊中校庭

◇郡総合体育大会（双葉町）
九月二十三日(水)午前八時

◇家庭劇場
九月二十六日(土)（大熊中学校）
「音楽隊がやって来た」

みんなで見ましょう

親の目・子の目

親と子の身近な問題を考える家庭教育番組です。
毎週金曜日午前10時福島テレビから放映
○放送内容
7/3 健康No.1　―子どもと健康―
7/10 尻もちついた、手が折れた。―子どもの骨折―
7/17 5歳児の世界　―心の交流をさぐる―
7/24 起点～ある校内暴力～―屈折する心―
7/31 学力だけじゃダメ！―原始生活から学ぶ―
8/7 小児胃潰瘍に現代を見た　―子どもの病気をさぐる―

テレビ放映

8/14 ひよっこに喝！～雑炊道場～　精神訓練道場と現代っ子―
8/21 父ちゃん自然っていいなあ―　―自然と子ども―
8/28 ハーイ！元気に動いて　―体力づくり―
9/4 欠食はこわいよ！　―子どもの欠食について―
9/11 頑張れ！かおる君　―子どもの精神力―
9/18 何んだかおかしい　―子どもの姿勢を考える―
9/25 偏平足　―子どもの身体の発達を考える―

詩吟講座に想う

詩吟は古より国民精神の作興に品性の陶冶に、或は武人の士気の昂揚等に推奨され愛誦された「国民歌」であったが、戦後退調ムードのところが、今や復古調をたどり全国的に各地に詩吟会が発足し盛んに吟誦されて参りました。わが公民館においても昭和五十四年一月に「詩吟講座」を開講し毎月第一第三火曜日午後七時より九時まで東流宗家寺門吟狂先生指導の下老若男女多数受講しつつ、三年目を迎えました。入門当初詩吟は固苦しいような気がしましたが、回を重ねるうちに朗吟の妙味にふれて参りますから、初心者でも音痴と思う人でも気楽に上達できますので、町民の皆さん一人でも多く参加するよう期待するものです。

周知の通り朗吟は個性豊かに超忽変幻緩急を恣に朗々吟ずれば、花鳥風月の名詩は直ちに清風心底に捲き起ち未知の万里の名勝に遊ぶ心境に入り、また先哲の憂国の至情より発する名詩を吟ずると時代を超えて直ちに胸に響き、未だ聞かずして古今の史実を識り血湧き肉を躍らせ、或は涕涙を催し憤りを発する三味境に入る、醍醐味満喫できると同時に他の民謡、歌謡と同様発声による内臓特に肺心臓腹筋の機能を旺盛にして健康上有効な芸能であることを推奨するものであります。以上私なりに入門の感想を述べ各位の会心を得ますれば幸と存じます。

橋本吟将（鉄治郎）

県高令者教育指導者 相双地区研修会に参加して

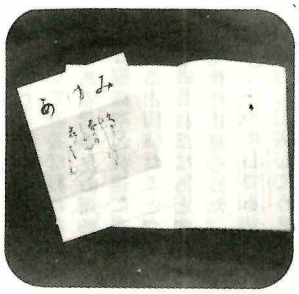
福島県高令者教育指導者研修会を大熊町公民館に於て開催、私も高令者大学の役員として参加でき意義ある講義を受け、指導者の認識を深め誠に嬉しく存じております。私たち高令者のため相双教育事務所長はじめ関係者多数列席し「地域づくりに果す高令者の役割について」松本廸男先生より講演をききましたので、その内容について、今の世の中の明るい住みよい姿、高令者の集い、社会参加の活動といろいろ問題が沢山あり指導者として強く感じさせられました。私達高令者が役割を果そうとするとき、その負された責任を十分認識し高令者福祉関係者が共に話し合いを進めて、自らの生きがいを見いだすという気持が一番大切ではないかと思います。

また寝たきりのお年寄りは一番大事にしなければならないと言いながら、丈夫なお年寄りは色々な設備の恩恵に浴することも沢山あるでしょうが、寝たきり老人には何もありません。私達は時折り「友愛訪問」をしておりますが誠に情けない現実です。

寝たきり老人にはなにも改って手土産の必要はないのです。病状に応じて思いやりのあるやさしい言葉をかけることが、医者の薬よりも力になります。長い人生を斗い抜いてきた寝たきりのお年寄りに「愛の一声運動を」社会運動としてゆきたいものです。人間はいったい何才まで生きられるだろうか。

昔は七十五才になると「長寿祝」をしたそうですが、今は八十八才が「長寿祝」高令者一人一人が共に長寿祝にむかって進みたいものです。（大川原　出沢　五郎）

短歌教室「あゆみ創刊」



社会教育の一環として公民館で開催されている短歌教室（会長中山貞夫）では、この程文集「あゆみ」を創刊した。

短歌教室は当初「短歌クラブ」という名称で昭和五十四年九月十一日、講師に群山同人（東北アラギ会）で活躍している浪江の青田サダ先生を迎え、会員十一名で発会した。

毎月第二土曜日に公民館に参集し勉強会を重ねて一年半、この辺で会員相互の勉強の成果と文化活動の少ない大熊町に少ないながらも足跡を残しお互いの研鑽の場にしていこうとする意志の発露により創刊に至った。

「モデル婦人学級」開設

社会教育活動を地域住民一人一人に浸透を図るため、各地区に「学習の場」を計画しましたところ、このたび熊町地区に就労婦人を中心に学習活動を通した「仲間づくり」を進めようと「モデル婦人学級」が開設されました。

開講式には学級生二十五名が出席、太田教育長さんよりお祝いの言葉をいただきました。第一回目の学習は原町社会福祉事務所池田中福祉課長さんより「福祉の動向について」講演をききました。

「福祉先進国」である日本の福祉の現状を知り、現実にやってくる高令化社会の対応策等山積みされている諸問題について講師先生と話し合い、有意義におわりました。

熊町婦人学級　武内友子

「お早よう」「今日は」
「今晩は」の一声かける
挨拶運動を広げましょう。

和牛を増やそう

今年の天候も異常低温が心配されるこの頃ですが、昔から凶作の年には良く牛が動くといわれたものです。これは金に困って牛を手離す人、凶作に発奮して牛を買って営農計画をたてる人、私は昭和二十八年に冷害資金五万円を借入れて牛を買ったのが「牛飼い」の始まりです。昨年の冷害には、米の収入が平年作の五分の一でしたが、仔牛七頭売って米の五倍の収入があり、生活にも困らず、その上去る六月県知事より農業賞をいただき牛を飼ってよかったと感謝しています。そこで私の農業の理想像は、

①屋敷に宝樹　宝樹とは先祖伝来の囲木や庭木盆栽類のこと特に盆栽づくりは牛づくりと同じといわれ「あせらず、たゆまず、手を抜かさず」朝晩の観察、手入れは何よりの心身の健康法です。

②家内に年寄り　年寄りは家の功労者、老人を囲む一家団楽の姿は実に頬笑ましいのです。又老人の生甲斐として牛を飼っている農家が非常に多いがその光景は農村の長閑さと生活の安定を表わすものです。

③庭先に和牛を　牛馬は昔から一家の大黒柱といわれ、有畜農業か今日の日本産業の繁栄を築いたものです。牛は役畜採肥から水田耕作の花形となり又冷害に最も強い作目として脚光浴び今や農業経営の主役に躍り出たことは非常に頼母しいことです。最近双葉牛が全国的に有名になったのがその中心は大熊町です。ところが最近「大熊に追いつけ」「追い越せ」を合言葉に各町村挙げて拍車をかけ始め和牛産地の王座を奮われる情勢になってきましたが幸い町当局農協か転作農政の重点施策として、肉用牛導入改良増殖にご指導ご援助をいただき感謝申し上げます。

「若葉学級」
学級生募集のお知らせ

現代の社会、家庭環境の激しい変化の中で、新たに多くの家庭教育上の課題が生じており、このような時世こそ子どもの教育に果す親の役割はきわめて大きいと思います。当公民館に於てもこれから親になる男女（未婚、新婚、妊娠期）を対象に家庭教育に関する学習の場を設けることになりました。開設の趣旨をご理解いただき進んで入級下さるようお知らせします。

記

一、開講は七月下旬の予定
二、応募人員……男女二十名
三、講義（含実技）内容
　イ現代の家庭と親のあり方
　ロ子どもの成長と社会環境

※入級希望者は七月二十日まで住所氏名　TEL を大熊町公民館（TEL二〇六五）まで申し込んで下さい。

あれから五年

鈴内梨園団地も、十ヘクタールの造成から植栽、柵掛と関係機関のご協力、入園者の並々ならぬ努力によりまして、現在は立派な団地となっております。振り返って見ますと、当時は盆栽松しか育たない岩盤、ユナ地で、一本の草も生えることすらできず、雨が降れば表土は流れ、園内は水が湧き、消毒も思うようにできない状態でした。強酸性のため土壌中和には十アール当り石灰二十俵、溶燐二十俵、有機質として養鶏場より生鶏糞を相当量入れながら、全園に牧草を蒔きましたところ成功し見たこともない色々な雑草が芽を出し、梨の新梢も見事にのびて「土地づくり」の第一段階で指導機関の諸先生から折紙がつけられ、私達の努力が認められました。今年は試験的に着果させた園地もありますが、今後は第二段階の着果に向って、全員が「土壌の管理と病害虫防途」に努力している今日この頃です。

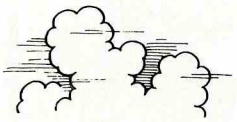
（団地会員）

町民憲章

健康で楽しく働ける　豊かなまちを　つくりましょう
みんなで助けあい　明るいまちを　つくりましょう
きまりを守り　平和な住みよいまちを　つくりましょう
自然を愛し　きれいなまちを　つくりましょう
進んで学び　香り高い文化のまちを　つくりましょう

文芸

空



大野小五年　仲野由美子

空は、とても大きい。
海も大きいが、
空の方がずっと大きいのか、
それが知りたい。
でもだれも知らない。
空は、とても大きい。

海

大野小六年　長谷川里江

きらきらひかる海
波と波がたたきあっている
海のそばにいると
のみこまれてしまうような
かんじがする

短歌

鎌田清衛

通院の父待つわづかをまどろみし
フロントガラスに桜散りくる

木下千代子

亡姑の好みし壺に芍薬の
花一杯に活けし供へぬ

川木裕子

墨染めの衣の衿を正しつつ
刻は生命とほほえみて説く

中山貞夫

渦巻きて春の嵐に耐えてゐる
竹の林の雄叫びを聞く

小松邦雄

らんまんと今満開のこのさくら
共に語らむそれぞれの春

小林かおる

やわらかに紫陽花の芽のふくらみて
春雨の中につややけきかな

飯田良江

吹く風に垂るる柳のやはらかし
池の面の水影揺るる

佐藤祐禎

菜の花の見えざることの久しくて
花屋の前に暫し佇む

鈴木百合子

草刈機背負いて強しエンジンの
音のみ響く畦の中にゐて

吉岡友子

田植終え一寸一息暇もなく
雑草青みて畑の手入れ

松本ミヨ子

うそ寒き五月の雨にそぼぬれて
カラスの声の淋しく聞ゆ

俳句

渡辺政美

春愁やいたわられつゝ薬湯に
花散るや諸行無常に人馴れて

佐久間信子

片言の子に訛なし桃の花
うぐひすの手習の筆置きし時

武内よね

亡き友の初孫冬の部屋まぶし
知らぬ家に友と来てをり梅の花

菅野ミヨ

春雨にしだるゝ柳めざめけり
麦踏や遠い思い出残る畑

結城千代

鶏の水呑む貌や春彼岸
木々の芽の色とりどりや雨上り

木村蓉子

濡緑に鎌と軍手と木の芽風
老夫婦一と日湯沿梅の日和

飯村洋子

春闘のどう渡されし朝の駅
初鰹包丁捌き見惚れをり

永井善子

種蒔きの心濁す沈丁花
春の風眠れぬ夜半の窓たたく

鎌田光子

祖母病めり越さむ峠は雪の道

猪井静枝

父母の國訪ねし孤児よ草青む

河西カツ

心の荷今何もなし春炬燵

中山安子

机借り書道習らひや桜草

川木裕子

葬の家まんさくの花盛り

民話

玉の湯物語

今を去る三百四十五年、伊達政宗の死んだ年、このへんに大地震があったそうな。山はくずれ、地は割れ、人々は転びながら家を出竹やぶに逃げこんだと。

この地震のあと、玉の湯はぴたりととまってしまったと。このころ「北に青根、南に玉の湯」と名だたる名湯、近所の人々はもちろん、遠くの国々からまで湯治に来て、それはそれは大変な賑わいだったそうな。

それがにわかにとまってしまったもんだからさあ大変。忠左門一家は湯が出なくては暮しになんねえから、先祖の住んでいた鴻草に帰えるしかなかっぺと覚悟をきめていたと。

その時いとこの人がいったと「湯への舎弟大聖院におがんでもらったらどうだっぺ」と。

大聖院は十年前家を出て三春の殿様に仕え、「水の事ならこの人」と大変信頼された修験者だったそうな。

さっそく大聖院に来てもらったあと。大聖院は一目見て、「これはわしの法力にはかなわんわ。あきらめるしかあんめえ」といったと。

大聖院は三春に帰っぺと思ったが、あんまり気の毒なもんだから、

「出っか出ねえかわかんねえが、神さまもわたしの法力に感心して湯が出ねえとも限んめえ。おれ一人よりも、玉の湯発見の玉林坊の子孫貴法院にも一緒にお祈りしてもらうべ」

というわけで二人は身を清め、湯の神の前の岩の上に坐って熱心にお祈りをはじめたあと。

けれど三日たっても、七日たっても、十四日たっても何のかわりもないもんだから、人々もあきらめていたと、だあれもいない野上川のせせらぎの中で二人は祈ること三七日（二十一日）昼頃、突然山はごうごうとなり、それが谷にこだまして、世の中がひっくり返ったかと思うと。湯は元にも増して岩の中からこんこんと湧き出してきたと。

湯守は大変喜び、村の人々もこのことを聞いて一目見たさに毎日大繁盛、遠くの人もどんどん来るので湯屋はせまくなり、大きな御殿のような家を作ったと。その内殿さまも来る、御家来衆も来る、それはそれは大変な賑わい。大変気分をよくした殿様は「見える限りの山々には湯守に与える」というお墨付をいただき大尽さまになったと。（温泉縁起）

みんなのひろば

遠来の客

木々の緑もますます色濃くなり野面を渡る風に葉づれの音もさわやかにきこえる六月の下旬に、古山一男さん方を訪れた時のことです。

梨の袋掛けや摘果に忙しそうな時期であったが「まあ、朝茶でも」ということで上りかまちに腰かけてお茶をいただいていると、古山さんが、「さあはいれ、はいれ」と言っているうちに一羽のツバメが頭上すれに開け放たれた玄関から飛びこんで来たのです。その嘴には巣造りのワラや泥がくわえられています。私は昨年も同時期に訪う機会があって、その時は雨の日で、玄関は締っていたが、ガラスが一枚はずされ、茶の間いっぱいに紙が敷かれ、子ツバメが騒々しく餌をねだっていたのを憶えています。茶の間は当然子ツバメ等の落下物が散乱するので、隣室に疎開していました。今年はツバメの飛来も遅れていたし毎日の掃除も大変なので家に入れないつもりでいたらしいが、「毎日軒先の電線にとまって玄関をあけるのを窺っているツバメを見ているとついつい可愛想になってしまって」と奥さんも連日の掃除を大変だと言いながらも楽しんでツバメの巣造りを待っているようです。ツバメの巣は玄関や軒先、風鈴などには見かけますが、茶の間の天井に巣造りをしているのは珍しいことです。古山さんは夜のとまり木にと巣の側に針金を張ってやり、何年も前からの遠来の客に愛情をかくしきれない様子でした。言葉だけの愛鳥ではなく、体ごと家族で見守ってやる心遣いは小鳥にも通じるのでしょう。帰り際に「毎年同じツバメが来ているということは確認できないし、同じつがいかも判らない。この巣で育った子ツバメもこの巣を利用するのかなあ。誰か知っている人がいたら教えて欲しいものだ。」と語っていました。ツバメの習性や帰巣性をご存知の方に教えていただきたいと思います。カラスやムクドリのように人間社会や環境の変化に順応して繁殖している鳥もいるが、環境に順応しきれず、年々減少している小鳥の方がはるかに多いのです。私達にはたいした手助けもできないが、せめて温かい目で見守ってやりたいものです。

館報編集委員　鎌田清衛

昔の思い出

私達子供の頃旧七月十四日の晩、舘、熊町間の田の周辺の道や畔を利用し、舘、町の子供が敵味方に別れて「火振」という催しがありました。双方の陣地に大火と小火（薪を積み重ねたもの）を造り、初めに我が陣の小火を焚き陣の在りかを示し小麦藁の松明に小火より火を移しそれを振り、或いは敵方に投げつけながら相手の部落名を呼び「奴ら、馬鹿奴だ、アンポ（菓子）買いにやったれば、アンポ、と言う事忘れて猫のしっぽ買って来て、いろりの角こに、おったてて、ニョーニョカンニョと拝がんだ」叫びながら敵陣の火振に松より火を付けた方が勝ですが自分らは町の大火には焚いた事はありません。町は大勢いの為に二、三方から攻め込まれおお火が付けられ空を赤々と焦がし焚かれてしまうのです。それを見届けると敵方子供らは自から自分の陣地おお火に付け焚いて終りですが明日からは昨夜の敵は今日の友で昨夜事を語り合う良き友達でした。今になり考えると農薬の無い時代大人が子供を利用し稲などの害虫防除が狙かと思います。火の明にとんで死滅する餓やウンカなど……此の催しも昭和初期で姿を消してしまいました。それは農薬の普及と子供の少なくなった事が原因でしょう。

熊二区舘　坂本甫　73歳

熊川運動場オープン

熊川地区に待望の運動場が落成し、六月二十三日運動場開きに続いて記念祝賀行事として「ソフトボール大会」が開催された。

これは昨年八月、熊川の河川敷に運動場をという地元住民の強い要請により、県の認可が下りて見事実ったもの、その当時は運動場といっても石の多い凹凸の激しい荒野で面積は広いものの、とても運動場としての適地ではなかった。

また整地するに当っても造成費資金の面で延び延びになっていた。

そんな折、地元住民の熱意に同調した小畑建設をはじめ田中建設ら各社の協力と地元有志の献身的な努力によってこの程、運動場開きまでの運びとなった。

記念祝賀行事は時より小雨の降るあいにくの天候ではあったが宇佐見英郎区長より経過報告、大熊町公民館長より「区民スポーツ振興に寄与してほしい」と祝辞があった後、第一試合小良浜対熊川少年ソフトでオープンを飾り、心から喜びあった。

御礼

図書の寄贈

この度、次の方々から公民館へ図書を寄贈していただきました。厚く御礼申し上げます。

◇**佐藤ミサ子**さん（下野上五区）
「たから島」外四十九冊

◇**吉岡郁郎**さん（下野上四区）
「さむらい読本」外二百三十冊

◇**渡部俊男**さん（下野上二区）
「世紀の悪党ども」外五十四冊

◇**小山和子**さん（下野上二区）
「婦人之友」外十三冊

◇**鈴木一雄**さん（下野上四区）
「追慕」

青少年に明るい家庭

次代を担う青少年を健全に育成することは国民的な課題である。

これら次代を担う青少年が心身ともに健やかに成長していくためには、青少年自身が誇りと自覚をもって自らの努力を積みあげていくことを期待しながら、家庭、学校、職場、地域社会等、青少年が生活するあらゆる場において、青少年の健全育成に配慮していく必要があります。

◎実践期間

昭和五十六年七月一日から八月三十一日まで（二か月間）

◎運動目標と実践内容

①家族みんなで明るい家庭をつくろう。

●家族団らんの機会を多くし家庭の融和につとめる。

●「家庭の日」第三日曜日、設定の趣旨を生かすようにする。

●家庭内における家事や労働の役割分担を決め、家庭の一員としての自覚と連帯感を高め実行させるようにする。

●親子で本に親しもう。

②青少年の社会参加を進めよう。

●勤労青少年の日（七月第三土曜日）の趣旨を生かすように。

③明るい社会環境をつくろう。

●**「お早よう」「今日は」「今晩は」の一声**かける挨拶運動を広げましょう。

●よその子どもであっても、自分の子どもと同じように愛情をもって見守ろう。

●青少年のいろいろな「悩み」「不安」の相談に積極的に応ずるように努めましょう。

④青少年の非行をなくそう。

●家庭の個室、アパート、空屋などが非行グループの「たまり場」にならないように常に注意しましょう。

●幼児からスーパーマーケットやデパート等における正しい買い物の仕方を教えましょう。

●家庭において「生命の尊さ」「人生の意味」についてよく話し合いましょう。

●他人への迷惑、生命の危険を考えて無謀な運転をしないよう注意指導をしましょう。

以上は青少年健全育成県民総ぐるみ運動の趣旨実践内容を書きました。この運動の趣旨を十分ご理解いただき、各地域、家庭の実情に応じ積極的に実践されますように。

ふるさとに限りない思いを

井手　馨

もう七十年になる。当時私は六年生だった。ある日受持教師だった田村茂雄先生指導の句会が催されたことがあった。同級生は現在元気の志賀隆宣君をはじめ男女三十人。今でもどの人の名も顔もとりたての写真のように頭にはりついている。句会は進んで披講という段になった。黒板に発表された中に今覚えている一句。

まるい月
　雲にかくれておしいこと、

が最高点でその日は終った。私の俳句もそれが病みつきのように思う。継続して作りはしなかったが、それらしいものは帳面にいくつか書きつけられ、それ切りになっていた。三つ児の魂百までもというが、俳句に対する私の思いも決して消え切ったものではなかった。三十年の田舎教師を終えて六十歳。図らずも俳句の火種が発火したのである。以来というもの飯を噛み噛みの作句。四、五万にもなろうか、その中から八十歳を記念して第二句集を公にしました。私本に終始した駄文ですが、こんなことで御容赦ください。

◆今は亡き父母への思い、野上の里の大杉や大銀杏、墓辺に湧き出る清水、木蔭を添えるさるすべり、一昨年晩秋の兄との別れ、育まれだ里への限りない思いを抱きながら、◆故里の句より

俗名を
　そのまま父母の墓すずし
故里は
　にぎる雪さえあたたかし
蛍来い
　わしも来ている母を見に
兄は亡し
　散りつくしてた大銀杏
ふるさとの
　墓辺の泉なほ涸れず
柿もはや
　甘き頃なり母いかに
春の月
　母とて限りある命
大杉のみ
　風を知る父郷なり
さるすべり
　うからの墓の一たむら
さすらいや
　尚あり母と春の月
同級生
大川原の志賀隆宣君に一句献じて脱稿。
蓮の花
　地獄の旅を共にせむ　四更

（筆者は野上井手昇氏の父快一郎氏（亡）の弟で教員退職後、俳句に専念され、第一、第二、句集を発行されました。妻の漢子先生も当町大野小学校に長く勤められた方で健在、現在小高町に居住されて居ります。）

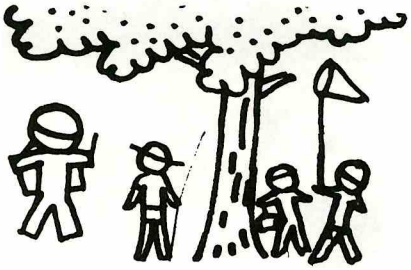
編集後記

○毎日異常天候が続き、昨年に引き続き今年も「冷夏か」と声を聞くと、

　雨　雨　早くやんでくれ
　早く出てくれ　太陽の顔

○子ども達にとっては待ちに待った夏休みに入りました。休みは子ども達にとって学校から解放感を満喫し、野外での生活が多くなります　交通事故や水難事故にあわないようお祈りします。

○館報の原稿をお寄せ下さい。要領は四百字詰原稿用紙一枚程度。

①　主張、産業、教養、文芸に関するもの何でも結構です。

②　政治的な色彩を帯びたり、個人非難に属するものでないこと。